妙藥博物筌

よたれろ
つねな

三

特1
2230

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用

人の家にまて上中下ちゃの紙をもつて三度ばかりの式を弟子に授ける法を長崎の出物

茶事の作法 全二冊 秘密に伝入

女の多是間違用とりしきん

集り上こにあづる多かりつと

女中は春の仕れうしたしてあと

向くちやうひれ或はかのつやと出

搭かんばの出さるとろぎ一切のたや

そんること出やう衣服ちゃ地と

やうれく陸れ者ちゃそれ多かや

ぬるころ墨きころ

やの秘伝密さん紙ぬ

るとし体であつめ料理物一切

の合れ久しくたくさんやしたさぬ

名香の方ちにたんざくもやう

ぶぐ多りよみやしひころ

口伝多のちしやし上中

下ところちんれ者ちゃ付の結ん

同縁ちくやうちゃ外女乃

者ちゃるの一切をのと

貝原先生の養生訓とや

毒を記り出づるといんとも

まりうぶくしと今乃人

紙ひがさ

延寿養生論 全一冊

牧本八一小冊にて人ちゃ養生

の極秘そのべうり食物乃

ぬるよう用くやうちゃ

の法ひとりあん面の法を

くりくちゃん

いも百珍 全一冊

はいもいも一色といろくの

早安ふぢふまりころ

安くて女でもできるやうふ

いろ伝名んの一奥よそのの

よたれろつねなこ目録

よの部

○癰疔并ニ便毒ト一

○癰疔ぬきの薬

○同付薬

○同口薬

○同付薬

○同円薬

同

同

同

同

七丁メヲ

八丁メヲ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用

特1
2230

○癰名方　親吉ちゝ　同

○癰疔の妙薬　同ウ

○癰疔瘡奇効良方　同

○烏膏　癰疔一切の膿血を損ずるよし　九丁メヲ
やけど多くよし

○烏麻膏　十三種の癰疔膿血熱毒毒虫蠱ある大風多く咬ある　同ウ

○神仙大乙膏　癰諸瘡諸毒虫蠱ある　十丁メヲ
蛇の咬ある　やけど切疽突疔

○便毒下し薬　三方　十一丁メヲ

○同　不潰を口をひらけ膿を出す方　同ウ

○便毒貼薬　同

○同内薬　同　同

○夜啼の薬　小児　十二丁メヲ

たの部

○痰の名方　二方　同

○痰よて膿ある而よ付薬　十三丁メヲ

○痰妙薬　つまりある時よし　同

○同　同

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○痰を治する要薬　同ウ
○同　同
○瘓癬白禿妙薬　十四丁メヲ
○同　同ウ
○同妙薬　八方　十五丁メヲ
○同　瘢　十六丁メヲ
○たゞき目あゝひ薬　同
○祕傳痰火妙灸　同

○脫肛の薬　同
○同付薬　同
○又方　同
○同円薬　十七丁メヲ
○同　浸し薬　同
○廉玉といふ陰囊などへ喰入るを治す　十八丁メヲ
○大便結するを治す　同ウ
○大便握り下しめ方　十九丁メヲ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○同妙方　同

ろの部　簽刺の葉とれ部より釜湯へ合すべし

○そげ立ろ葉　十九丁メウ

○同　同

○そこ海めれ葉　二十丁メヲ

つの部

○痛を治す　同

○婦人の痛血の石を治す　同ウ

○頭痛名方　同

○同付葉　九一丁メヲ

○頭痛の葉　同

○同名方　同

○同　同

○頭痛ト　同

○突眼の妙葉　九二丁メ

○突目又ハ聲障俄に生するを治す　同

○ 突疝愈く後又臓を治す　廿三丁メヲ
○ 聾を治す　同
○ 痛風四肢疼而よ數葉　同
○ 同蒸葉　同
○ 邪祟　同
○ 又方　九四丁メヲ

ねの部

眠を覺す葉　同ウ

○ 睡多を治する方　同
○ 大病の後晝夜睡こと切なるを治す　同
○ 鼠の咬るよ付葉　九五丁メヲ
○ 同　三方　同
○ 盜汗　ねあせを治す　二方　同ウ
○ 癖の葉　此葉百臓抱よ　九六丁メヲ

なの部

○ 癜風の葉　二方引葉一方　同ウ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○癜風の妙薬　九七丁メウ
○同　白黒ともよう〳〵　同
○瘡瘍の薬　二方　九八丁メヲ
○陰瘡て腫しすゝ湯爛るゝ用る方　同
○長血の薬　赤白帯下　二方　同ウ
○同止薬　同
○雜瘡の薬　催生　四方　九九丁メヲ
○なつゞの薬　三十丁メ

よの部

藤井呂求子見隆纂輯
長岡恭齋　丹堂　校正

○癰疔　并ニ便毒ノ下〳〵

一大蟹　赤ハ其まゝ　赤いろやき　蘆葦　茅根　沉香　各等分　末茶　粉うし　其まゝ

右酒よてゆ〳〵醂よかゝ用ゆべし。膿消膿ゝ

ゝむ重ゝつゝ用ゆ長附も末茶ハ水ゝ入べ

○癰疔ぬき薬

一雌黄　白蛇　石灰　長胡の粉

右藜蒿の汁よて粘し。茄子の實かゝ膿

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

ねの口へさすべし

○癰疔の付薬

一黄牛角　くろやき　梅醋にて飯にて付べし

○同じ薬

一黄牛歯　くろやき　胡麻油にて付べし

○又方

一菫　但夜草　沉香　麝香　白粉　三分一

糊糊のくろやき能く粉にして付べし。又糊糊

をすりて腫るる所にてよし

○癰疔内薬

一大黄　甘草　黄耆　黄芩

括樓根　茯苓　沈香　甘草

右煮法つるのごとし

○癰名方　親試

一野田貝の中へ醋を入れ炭火にて焼。醋入

たるを三度入れべし　黄柏　赤小豆　苦参

名号分　くろやき　ひこ味の目かど貝を入れ合せ

米の醋にてよくとき合。癰れ首を十文字に

刺割 右此薬を一日に二百度も煎ぜ用ゆべし。上よわまるなり。又くすり損ずるハ甚上へ引し。上よわまる

末薬をあてさしするなり

○癰疔の妙薬

一人参　又八霜　三分　甘草　生

粳米　加　炙

右酒にて用。右龍の膏にてもよし

○癰疔瘡奇効良方

一南棗　連翹　香附子　苦薬　北黄

川芎　桔梗　各五匁　苦楝皮　一匁　大黄

莪朮　縮砂　白本　各三分

白芷　荊芥　茯苓　柴胡

人参　乾姜　各　麝香　各三分　茸茸　各三分

右各細末し一包四匁ふくめて或ハ煎湯にても用

○癰疔一切の膿ぬる膿ぬるもいまだ膿ぬるよも法の寸損疵甚きよも付て即ち痛を治。膿血を自ら押出し。陽実傷に対くあとなく愈す

一烏膏

清油 十匁　黄柏 一匁　杏仁 を匁

乱髪 雞の　皂莢 一枚出 食ざるを 蒸皮仁を去

右の薬油に浸し一昼夜をき然る久いうるを文火にて煮こがす。其後渣をうりて煮て臓月に採うる猛油を煉合也其後松脂を匁麒麟竭 を匁入く其後麝香を分加へこと かき合也

○烏麻膏

一癰疽十二種。疔瘡久〳〵愈ざる膿血載毒 或ハ蛔毒蟲に螫れ又犬龍等に咬れしうるに付て立所に痛む。年久き瘻瘡又ハ疥癬く後再び をうるに付れバ膿血出く則痛を為肉を蝕し て効あり

清油 十六匁　唐蝋 四匁　丹 四匁 二匁

右午の刻うり煉四物まて煮文火まて丹を入次に唐蝋を入煉べし。此薬調合のときハ 小児婦人雞犬等近屋うり次

○神仙大乙膏

一癰疽諸の瘡年月久きも生きも傅て治す。又膿を吸おすも。又諸毒蟲獸の咬る。湯火傷。切疵。瘡疥

清油 石九目　黄蠟　玄参　苟菜
白芷　肉桂　生芹　白二丹 六拾四匁

何れも刻み油に浸し。表ハ四日裏ハ三日。秋ハ七日。冬ハ十日浸し。火にて焦がと煮て袞に て漉し。絞て煉る。冷て後丹を入 柳枝

筅にてかきまぜ再弱火にて久敷煉なり

○便毒下し薬

一皂角皮刻み三の茱一服かと煮四又度刻四

○同

一冬葵子を粉に酒にて一度に飲ケと服すべし

一肥皂子黒燒空心に酒にて服すべし 即瀉滑す

○同

一糯子の木を五一束に切。水五升入て合て煎

○便毒不潰とをあけ膿を出す方

一燕屎　定粉　又ハ米の白粉なども　牛蒡子　各等分

合粉よし　研よて解付べし

○便毒貼薬

一樗實　皮ながら焼　藁灰汁にて

粘とのべて付べし。又柿漿もよし

○同内薬

一糸麻　葛根　各等分

右薬用べし。但虚弱なる用の人は用べ

老こうの人は人参敗毒散を用べし

○夜啼の薬　小兒

一馬骨を粉よし。乳にて用べし

たの部　ちきょう　うるはきの部　産後の薬よし

○疼を治す

一沉香　白朮　羚羊角　白檀

木香　香附子　人参　蓽撥

縮砂　檳榔子　延胡索　没薬

霍香各等分　丁香皮　麝香　雄黄
薰陸　訶子　明椒　龍脳
右二十味細末し蜜にて丸し一粒づゝ
白湯にて服べし。疼及ひ虚労を治す

○疼の名方

一陳皮を去皮　皂角子（物にて石にて碎き　四味にて挽粉にし）　茯苓子　大きいむ
木香　乳香　紫蘇子　各等分
右細末し糊にて丸し大さ豆粒の如く
まゝ用ひ

○疼にて膻る不可付薬

一天南星細末し　麝香　大きいむ　蓽麻子　皮と去搗碎　二つかど
右三味薯蕷皮を去練すり煉合膻る不可
付べし。一日に二三度も付べしてよし

○疼妙薬つまり方付よし

一杏仁　蓄粉　白檀各等分　樟脳七度やき
右四味細末し蜜にて煉湯にて用。乳疼
に八生姜の汁にて用ひ

○同

一赤小豆の粉をきぶきとして用。胸の痞する時もよし。又方一皂莢黒焼 蘿蔔子炒各等分 細末 生姜汁を蜜より三分一加へ右の粉末を煉合胡椒の大さ丸一度に五粒ずつ白湯にて用

○疫を治する要薬 化疫丸

一糸瓜を焼かぐろ黒焼にして細末し棗の肉にて○ひ大さに丸し酒にて一粒づつ服す立処に驗あり

○同 瓦粉丸 薬丸

一切疫結滞ほり吐どもいでぐるく。久く嗽ひず氣塞り妨悶し疫尖嘗嗽に用ひよく効あり。瓦竈子 蚯子殼を火にて煅醋にて浸し。又炮 如ひの三度すべし。丸蓼九月の比黄色に熟したるを穰子を去れば鮒売に和搗て餅のごとくにし陳皮を各分に加へ陰乾にし。細末し。湯にて蒸餅を浸丸にて丸薬とすべし。生姜湯にて服すあり

○瘕癖 白禿妙薬

一膽礬 弐匁 大風子 壱匁 明礬 四匁
緑青 三匁 古酒 文久 酢 文久
水 文久

右酒酢水合して右の薬を粉にして炭火にて煎て付るなり。煎終て初日ハ一日次ハ三日次ハ一時以上三日なり 右妙方なり

○頑癬を治す

一小刀の先にて田虫の上を小くゝ大といへ字をいくつも書べし

○同妙薬

一百草霜を飯にくいまぜてよくねりて傳べし 奇妙の薬なり

○同

一びつゝ 蠻薬なり 大黄粉よし
黄連 粉よし 人参 粉よし

右四味合たゝしをすり裏に付へし

○同

一あまがへるの腹にてすりてよし 奇妙なり

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○同
一芸薬仁研て細末し る麻まて解塗
べし 立処よ愈
○同
一生大黄の根をおろし 壺よ入 其中へ右き煤
明礬の焼粉 剃刀磨をこそげ 各等分
右右酒よて練すり合付べし
○同
一虎耳草 莖 大黄 酸漿 艸

右三色をすり合塩かし加へて付へし
○同
一石蒜の根を竹の刀よて切 其切口よてい
うよもつくことをするなり
○同
一貝母を研よて付寄めなり
○同 癜よもよし
一硫黄 巴豆皮と 和大黄 生
右細末し 絹よ包み下地を布よてすり右

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

の汁を付べし

○たゞき目あゝひ薬

一白礬焼過絹ゝ包こ乳汁を温めて振かしさらく洗へべし但し挽茶にてもよど

○秘伝疫丸妙灸

一 ㊀●㊁㊂㊃㊄㊅㊆●〇〇 香丸ひき黒豆の面

ゝ灸すべし妙なり

○脫肛の薬

一蕈麻子 百草霜 各分

米泔の湯ゝて腸湯させ。かゞどうく腸を温めて右の薬糊ゝて煉そろ〳〵と付べし

○脫肛付薬

一大腸虚冷して脫肛ゝ成ぐるを治する方。

竭牛と黒焼ゝし猪脂ゝてねり脫肛ゝ貼べし。立処ゝ縮る大ゝ效あり按桑樹ノ上ニアル蝸牛ヲ用テ更好

○又方

一五倍子半斤水を入煎煮て爛し白礬十匁加へ右熱なるを長桶ゝ入脫肛を湯氣

よて燻温めよ　おし托バ即収るなり。
又ハ右二味を細末し　草鞋を熱あぶり　此上よ
葉を置て脱肛をそろくと托ても収る也。
但婦人ノ方ヨシ　円葉ハ人参　黄蓮　升麻の類れ
剤を服して全愈（）又苦仁を炒搗て
膏となしこれを付るもめなり
○同円葉
一猪砂散　大腸虚すれバ脱肛ゆる
猪砂　黄連　木賊　各等分

右粉ハ　飯の汁湯にて服す
○同　浸し茶
一艾葉を濃煎じて脱肛を浸すべし
○同
一萆麻子　却て　明礬　あけびの皮
右三色粉ハ　糊にて辛め百匁　丸　穴ハ張
べし。五処ハ引込なり
○鹿蚕ハ　虫陰嚢などへ喰入るを治す
一酒を蚕にぬりをくべし。蚕死してとのづからとれる

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

なり。ゆえあやまつてこれを出すれば次肉よ
ぬけていつまでも痛るものなり。たゞこれ脂を虫
よ付て出もし

○大便結するを治す

凡ソ大便秘結ノ病証不一。風秘。氣秘。寒秘。熱秘。湿秘ノ品アリ
又胃ノ虚実ヲ察シテ治スベシ。又老人新産ノ婦人ナド氣血
虚シテ腸胃結滞シテ大便結スルモノアリ。毒二通利ノ薬ヲ用ユ
ベカラズ。恐ハクハ元氣ヲ傷ラン。惟血ヲ滋燥ヲ潤ス薬ヲ用ユベシ

一 郁李仁　熟地黄　麻仁
桃仁　杏仁　枳殼　厚朴
黄芩　大黄　甘草　煎〻用

○大便秘結ヲ下し方

一巴豆　乾姜　韭子　良姜
硫黄　甘遂　椿子　各等分
右粉よし蜜よて丸し一の間よ胡麻の油を
塗て握るべし。浮ハ則冷水よてよ洗べ

○同妙方

一巴豆　毒を去　甘草　大黄
韭子　各　硫黄　各等分　貳味共

○毛髪を丸し山椒を粉よし粘よ押合せ

男ハ左女ハ右の乳中より入右の乳茎を拔るべし。即ち下るなり。止んと欲せば山椒と蓽茇とを絞こ服すべし

〈うの部〉

○そげ刺の茎乳部より委敷考へ合すべし

一乾栗 黑焼 大 蠅 同 大 樓 實 月脂 黄牛角 各粉 右そく飯にて付べし

○同

一葛の根小塵ともに 黑焼

○そこまめ此茎

一鯨のひげを粉にし粘に押まぜ付紙とふるまして密。膿ハ早く付べし

〈つの部〉

○瘡を治す

一奇效丸

楊梅皮 三十目 木香 乳香 殺人參 胡椒 黄連 丁子 熊膽 蕓茇 蕓茇 蕓茇

右丸となし辰砂を用て衣とす

○婦人の瘕血の乃を治す

白神散

香附子 生姜 白朮 生姜 和人参 麝香

参を用ひ 寒晒糯米 茅根 水煮

右細末し糊にて丸し湯にて用ひ

○頭痛名方

一香白芷 川芎 各大 黄酒に浸し 黄芩 同

黄連 同 香附子 同 細辛 同 各中 茅根 同

右細末し湯茶一つかと酒にて一日に三度

つ用ひ 上戸ハ碗かく

○頭痛付茶

一鉛 黑焼 火にて焼鎔るの時硫黄を拌

べし。黑く焼るなり。右痛ふに糊にて付

ゝミ付かへ貼し

○頭痛の茶

一芎藭 白芷 細辛 茅根

香附子 黄芩 黄連 酒にて浸し日干あぶる

白菊葉　ツトヲ揉碎き古酒ヨ度し日三ヲあぶる

防風　ツトヲ芦頭を去雜こおしあぶる

生地黄　ツトヲ粥をいむ竹刀よてきざむ

蔓荊子　ツトかしあぶる

鎌倉菜胡　水よてあらひ刻三寸ツト

荊芥　ツト

藁本　ツトヲ

耳菊　ツトヲ二三寸ヨ切焙り上度を去刻こと

細末して用ゆ

○頭痛名方

一蟬の殼　粉にのしたへ根の汁よて鼻の内へ

もくつを込べし

○同茶

一小麦藁　を一束ヨ切。鍋よていり焼古酒

よてけし二度焼。

白芷　弐分　川芎　弐分　細辛　弐分　紫胡　弐分

合粉よして湯よて用ゆ。眉の間痛よハ

藁灰　弐分　加へ用ゆ

これ合●色々どよ花しゑよハ茶なり一

包ハ廿粒也。一度冷せ出下る也。正度附を

湯よて色を洗へべし

○頭痛ト

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

一赤地利 六分黒焼 右苧麻 六分 麒麟竭 五分
右細末し湯にて用ひ○塵渡塵あれ頭
痛によし。鬢のぬけるによし。又ハ眉毛ぬけ
るによし。下血にハ酒にて用

○突眼の妙薬

一蘘荷の白根を挍て塗付てハ又
赤通の薬れ汁にて付べし。竹刀にて突くも
も。此薬を付て癒ふ

○突目又ハ醫障紙に生するを治す

一蠅の頭を和らかに食粒女の乳汁にて煉
合せろしさすべし神効あり

○突疵食くゝ浸入膿するを治す

一蕁麻黒焼 小角豆 各五匁 艾葉 各
右煎湯にて用ひ

○聾を治す

一附子を酢に浸し削て小指の如くにし耳へ
入べし

○痛風四肢疼痛に数薬

一烏賊骨とけづり粉よし。濃醋よて解ぐ疫
而を布よて搾肉の色赤なりぬる時ひ茶を付
べし。又硫黄と醋よて解付るもよし

○同蒸薬

一柳の皮（仕あを皮を削り去）一斤酒よて煮。和ぬる時熱をす
ぐよ布よ裹痛腫ぬる上へあてて蒸べし。冷と
しらハ又煮て元易てよし。白虎歴節とて四肢節
々虎の咬ごとく甚く痛こ腫ろよひ方よて止べし

邪祟　丹溪日俗ニ衝悪ト云ト　和俗モコレヲ衝モノトイフ

一桃仁五十碎き水よて煮熟して汁を一度よ
服す。吐逆すをバ治するなり。若二三日も病不
退して吐逆せされバ又右のごとくよして服すべ
○又鬼魅よ犯されて函胸よ塞ぐる時ハ伏龍肝
を粉よして鼻中よ吹入べし

○又方

一邪祟或ハ発狂悲泣歌舞。吟呻などす
るよ蚕退紙を灰よして酒よて服すべ

ねの部

○眠を覺す薬

一人參　茯苓　酸棗仁　各等分　粉よし

陳皮湯にて用ゆ。ねちけきハ部ろ眠る

○睡多を治する方

一酸棗仁　生にて　好茶　二匁　生薑汁につけ炙て微焦　搗羅て散薬とし一服或ハ二匁

ゑ水七分入六分ゑ煎じ食て温ゑ服す

○大病の後晝夜睡てとあさハざるを治す

一酸棗仁　榆白皮　等分水煎し服すれハ睡也

○龍の咬るゑ付薬

一燈心とかゝ搗ゑかさめ焼ハし水にて練付る

神ゑ薬を付てゝ付ゑ洗ひをゝして付べし

ゝひぐゝろ而をあゝひ付べし

○同

一薫陸　龍養　等分　粉ハし咬るゑ処ニ付べし

一又ハ　猫の髭　ゑ焼　麝香　少　蜜にてねりて付べし

一又　桐木　焼て細ハし糊ゑ押まぜ付べし

一又　牡蠣　大　石灰　中　黄柏　中　粉ハし　藥蕎

の汁にて付べし

○同方

一 鶏子すこと合用由

○同方

一 白鄰躅 陰干にして粉にし付て妙なり。

○盗汗 ねあせを治す

一 五倍子細末し唾にてねり腎の中に塗。帛にて縛。一夜置て即止。又乳汁にて五倍子の粉とねり合蒸熱して腎に入。桃核と二つに

きりこの殼を蓋にして綿帛にて縛りそくべし

一 又白芷一味細末し自身に唾にて解腎の上に塗もよし

○又方

一 露のある桑葉を早朝に採陰乾にして粉こなし一度に五匁ほど飯の湯にて食るもよろしく遂きて服すべし。冬の汁にもよろしく殺ろう

○痲の茶 此茶万服湯にもよし

一除鬼樹　一名あつさゝれり。百毒蠱の蠱ゝるゝかたて付べし

義小莖ともよ大釜へ入煮じ。義小莖ハゝり捨あと

の汁を小釜よて初りつめ。初むくとかゝるハ

蝎牛れ初を入煉合て。初姫と膣拍れよハ

筒よて引へし。痞よハ紙よ付胸よゝりてはし

なの初　ながちちふの初よもあり

○癜風の薬

一生姜　きさゝ　明礬　硫黄　丹

右四味布きれよ包こつよく擦べし

洗ひ梅砂よてときさ六日ゆど煮こ付べし　赤

黒く成食べし

○同

一硫黄　阿仙薬　丁子　各等分

右粉よして付べし。遍身よ多く発るハ附

湯と浴て後薬を付る

○同引薬

一杉木　黒焼　硫黄　二味等分　虎耳草薬汁砂とか

加へ癜風を熱湯よてすり洗ひ右の薬を塗。

鬼耳茸をすり刷毛よてぬべし

○瘢風の妙薬

一蒼耳 蘇 硫黄 を共 塩 共

右ゆりこの莖を一束よ切。其切口よ右れ硫黄と塩とを付瘢風を擦べし

○同 白黒ともよう

一いとう大なりこ大 胡椒 中 うまうが

右粉よし 熱湯よて洗ひ付べし

○接膚の薬

一清燥飲

黄芪 大 人参 大 蒼朮 中 茯苓 中

当帰 小 式味子 小 甘草 小 蘇 用 四

○又方

一鬼絲子 式 人参 同分 甘草 小

右粉よし 酒よて切こ用

○陰瘙て起らす湯衰るよ用る方

温熱に着或ハ冷水を飲身寒腎虚を損し筋骨弱く起居挙動がさきよ

一雀卵白　天雄製　兎絲子　二味細末し　雀卵
卵にて調ずかどる丸し　空心に酒にて三粒て用

○長血の薬　赤白帯下なり

一鮑　くろやき　續隨子　七日上の皮を去油をとりて

右二味調合しかづく　白湯にて用ゆ

○白血白血の薬

一雀　白芍薬　当帰　白粉かく入

右蒸し眠す

○白血白血の止薬

一圓胡　くろやき　よくすれ挽薬を立く裏中へ
かし加へ用ゆべし　忽血止るべし

○雞產れ薬　催生

一雀巣　黒焼　香白芷　百茅根　葛粉　名当帰　粉
しゝ十歳より内れ男子の小便を温てかき立
て用ゆべし。遠產　横產も即時に安く產る

○雞產の妙薬　催生

一熊膽　香白芷

○同　催生

桂心　名粉

一 佛手散

人參　枳殼　甘草　桂心　芍藥

地黃各等分　附子　耳蕈かし

右粉よし　百沸湯よて用ゆへし

○同　催生

一 當歸三匁　枳殼等分　干姜等分　桂心計分

右の藥ハ一二貼用て即ち產るなり

右赤白帶　羅產の法藥　ふの藥　さの藥

よ素可互考　ソ產ニ臨ミ破水下テ遲滯セハ右ノ藥方ヲ用テ効アリ遽テ早ク催生ノ藥ヲ服スベカラズ

○なつぶしれ蕪　小兒以ら敗のさしうるあと

一蛭蚓のもちうる法を嚥よて解分べ

妙なり　法の義のうるよし

貞觀政要

合四十篇
全部十冊

此書ハ唐太宗皇帝ト群臣ノ嘉言善行良法義政ヲ呉兢編類ス其後元ノ儒臣戈直諸儒ノ論説ヲ附載シ考訂註釈ヲ加エ其義ヲ演ベ事明ラカニ辯質シク讀ムニ曉シヤスシ明ノ憲宗帝御製ノ序同呉澄題辭ヲ述ベ世ニナクンバ有ベカラザルノ書ト云ヲ初テ讀ミ盛ンナルカナ唐貞觀賢臣良輔直言諫奏シテ政道ヲ輔佐ス妙此人物ノ隆ンナルヿ古今稀ナル如ナリト感激シテ朝夕手ヲ放タズ此書ヲ熟読スルニ依テ漸ク唐ニ良臣多キ所以ヲ覺セリ唐朝ノ人物隆ンナルハ太宗帝ノ一心ニアツテ更ニ唐ニ而已人物有ニアラザルベシ其故ハ太宗帝群臣ニ對シテ知遇ノ厚キ己レヲ屈シテ諫ヲ納レ賢ニ任ジ能ニ委子臣下ハ言フニ及バズ皇妃太子ニ至ルマテ諫ヲ奉リ日ミ可ヲ獻シ否ヲ退ク諫奏スル人ハ已ガ行ヒ正シカラズシテハ諫ヲ難シ自ラ人智賢良トナル所以也是ヲ以テ賢臣多キハ帝ノ心行ヨリ生スル処ナリ此所ノミ人物ノ隆ンナルニハアラザルヘシ太宗帝ノ如クナラハイヅレノ御代カ賢佐ニ乏キ所アランヤ和漢此書ヲ以政事ノ要務ナレヒトフ宜ナリ亦モ政事ニ用ユル而已ニアラズ士庶人タリ所此書ヲ讀ヿヲ専務トセハ脩身齊家四書六經ヲ讀ムヨリ遠カルベシ其故ハ經文ハ高古簡雅ニシテ聖人ノ言迫切ナラズ此書ハ義理明融質朴ニシテ記スル所ノヿ詳ニ遠キニ行ヒ必卑キヨリ入此書ヲ鑑戒トナシ精ヲハゲマシ行ヲ慎ミ人ノ善言ヲ聽ヿヲ好ミバ朋友下僕子孫皆諫ルノ人タルベシ翰工將身タリ己ガ心ヲ以テ己ガ意ヲ正シ省ミテバ日ニ新ニシテ日日新ノ聖旨ニ叶フベシ既ニヨリガ如キ下愚ノ賤民ト雖トモ政要ヲ熟読シ齊家ノ要此書ニ盡スヿヲ自得ス国ヲ治ルヿハ身ヲ脩ムニナルヿ既ニ大学ノ明文明々タリ正心而后脩身脩身而后齊家齊家而后治国治国而后天下平ナリ上ツカタヨリ下庶人ニ至ルマデ読学シテ身ヲ脩メ家ヲ齊フル本トナスベキヿ此書ニ如クヿナシ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用